

虹の翼が羽ばたく時 ～七曜の魔女の回顧～

山本黒壺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それはおそらく永夜異変の後ぐらいだったろうか。かねてより、魔女パチュリー・ノーレッジは自らが監督役を務める一人の少女について、いささかながらも悩みを抱えていた。

紅の悪魔、狂気の虹翼——フランドール・スカレット。紅魔館の主の妹たる彼女に対して、自分はどう接すれば良いのだろうか。あしげく館に通う知人の魔術師・霧雨魔理沙に頼ることすらしたけれど。

何が正解で、何が間違いなのか。知識と日陰の魔女にすら、それは未だ知り得ないことで。

……そんな中で、パチュリーは決意する。この現状を、変えなければならぬ、と。

“動かない大図書館”が動き出す時、紅魔の館に運命の夜がやってくる。

目次

1	図書館の少女たち	1
2	狂える少女は絆の夢を見るか？	6
3	闇の中で少女は	9
4	少女は檻の中にひとり	14
5	運命と少女は出会う	19
6	銀紅の少女と契約の夜	24
7	それは少女の決意	30
8	弾幕少女たちは月下に舞う	36
9	星と月と少女たち	41

1 図書館の少女たち

幻想郷。

深い森の向こう、霧の湖のほとりにその洋館は存在する。

まるで周囲の景色から隔絶されたかのように不釣り合いなその様式。ぐるりと近付くものを威圧するかのよう巡る壁、その向こうに聳え立つ館の外壁の色は目を射るような紅。

窓は少なく、一際高く古めかしい時計台が天を突く。

庭園は綺麗に手入れされてはいるものの、美しさとは裏腹にどこか退廃と滅びの空気を匂わせる。

この屋敷のことを少しでも知る者たちは、一部の例外を除いて皆一様にその敷地内に足を踏み入れようとは思わない。

この紅い屋敷の主が、どんな存在かを知っているからだ。

屋敷の名は紅魔館。悪魔の住まう場所である。

☆☆☆

「よしフラン。今日は昔話をしてやろう」

「どんなお話？ マリサのお話は面白いから好きよ？」

「ちよつと照れるぜ。……これは、私が私の爺さんから聞いた話だ」

紅魔館の地下、幻想郷最大の蔵書量を誇る図書館。

その部屋の主である魔女パチュリー・ノーレッジは、ふと読んでいた本から顔を上げ、少し離れたところで話をしている二人の少女の方を見た。

少女たちは背の高い本棚と本棚の間の床に直に座り込み、楽しげに言葉を交わしている。

本棚に背を預け、身振りを交えて語っているのが霧雨魔理沙。

トレードマークのトンがり帽子は、傍らに立てかけた魔法の箒の柄にかかっている。

汚れが入るので箒は出来る限り持ち込んで欲しくは無いのだが、まあ言っても聞きはしないだろう。

その対面にいるのは、この館の主の妹君、フランドール・スカーレット。

幼い体躯に期待を漲らせて、魔理沙の話す言葉の一語一句すら聞き逃すまいと、目を輝かせている。

どちらも金髪であるためか、何となく姉妹のようにも見えてしまう二人だったが、その感想を完全に否定する要素が一つ、存在していた。フランドールの背中、フリルの多い真っ赤な服の背に開いたスリットから飛び出す一對の翼。

ねじくれた枝に宝石の碎片を飾ったような、どんな生物とも違う七色に輝く異形のそれは、端的に彼女が人間でないことを示している。

「マリサのお爺さんってどんな人なの？」

「うーん、とにかく元気な人だったな。暇さえあれば私をいろんなところに連れて行ってくれたよ。そしてそこでいろんな話を聞かせてくれた。家に帰るのがいつも遅くなるから、良く二人して親父に叱られたっけ」

「素敵な人だったのね」

「ああ。私の憧れだった」

昔を思い出すように遠い目をする魔理沙に、フランドールは話の続きをせがむ。

好奇心のためか、その背の翼が落ち着きなく羽ばたいている。

「昔々の話だ。とある街の中心に、王子様の像があった。身体は金箔で覆われ、目には——」

その話は知っている、とパチュリーは思った。

心優しい幸福な王子の彫像が貧しさに苦しむ人々を不憫に思い、旅のツバメに頼んで、自らの身体を覆う金箔や宝石を悲しみの中にある人々に分け与えていくのだ。

ツバメは王子のそんな行いに同情心から応えていくが、無償の献身を続ける中で段々と王子を見捨てられなくなっていく。

そして冬が来て、後に残されたのは寒さに凍えて死んだツバメと、すっかりみすぼらしくなって取り壊された、王子像の鉛の心臓だけだったという物語だ。

個人的にあまり好きな話ではないのだけれど、魔理沙があまりにも情感豊かに物語るものだから、何となくパチュリーは目を閉じてその声に耳を傾けることにした。

……そういえば他人が物語っているところを耳にするなど、この数十年ほどついぞ無かったことだった。

『——ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん。私の剣の柄からルビーを取り出して、あの夫人にあげてくれないか。両足が台座に固定されているから、私は行けないのだ』

王子は言う。自分が生前いかに幸福だったか。いかに無知だったか。いかに罪深かったかと。今の自分に出来ることは、自らの身の輝きをそぎ落として、誰かを少しの間でも幸福にしてあげることだけなのだ。

『——苦しみを受けている人々の話ほど驚くべきことは無い。度しがたい悲しみほど解きがたい謎は無いのだ』

ああ王子、とパチュリーは思う。

それは謎ですらない。原因もなく終わりもない、この世界を構成する要素の一つでしかないのだ。

嘆いてそれを変えようとしても、どうにもならない。出来るのは刹那の間、それを忘れることだけ。

「……そうして鉛の心臓とツバメの亡骸は、天使の手によって天国へと運ばれました、とき。そんな話だぜ」

「ふーん」

芳しい反応を見せないフランドールに魔理沙は苦笑し、自らの手で小さく拍手をして見せた。そのささやかな音がすっかり書架の波間に呑まれた後で、ようやくフランドールは口を開いた。

「良くわからなかった」

「そうか」

頷く魔理沙。半ば予想はしていたのだろう。苦笑を深めつつ、胡坐をかいた自らの膝の上に頬杖を付く。

パチュリーはそのやり取りを見つつ傍らのティーカップを手にして、それがすっかり温度をなくしていることに気付くと、溜息になり

かけた吐息と共に、元の皿に戻した。

「どの辺がわからなかったんだ？」

「ぶっちゃけ全体的に」

かくつ、と魔理沙は頼杖から頭を滑らせてつんのめった。

「……えーとだな、フラン」

「ねえマリサ」説明をしようとする魔理沙を遮るように、フランドールが言葉を連ねる。「ニンゲンは宝石を貰うと幸福になるの？」

「あーっと、少し違うぜ」魔理沙は難しい顔をして言った。「何が幸福かは人によつて違うだろうが、宝石を貰うことが幸せなんじゃない、それを売ることです生活が楽になるから嬉しい、ってことだぜ」

「だから王子様は幸福だったの？ 生活が苦しくなかったから」

「最初はそうだったんだろうな。自分の周囲にあるものが満ち足りていて、それだけしかこの世にはないと思つていたから。……その分、死後に本当は自分の見ていたものが世界の一角に満たないことを知つて、ショックだったのさ」

「何で王子様は幸福を手放したの？ 幸福なことは罪なことだから？」

「幸福は罪なことなんかじゃないぜ。王子は自分が与えられてきた幸福に見合うぐらい、自分以外の人間も幸福にしたかったんだ」

「わかんない。何で他人を幸福にしたかったの？」

「爺さんはこう言つてたな。『幸福というのは本来、他人にくれてやつても目減りしない』んだそう。何か上手い商売の文句みたいだが？」

首を傾げるフランドール。

「あー、つまりだ。フランは私と遊んでると楽しいか？」

「うん、楽しい！」

「フランが楽しいと、私も楽しい。そういうことだぜ？」

「駄目か……」

がつくりとうなだれる魔理沙。

パチユリーは苦笑した。

傍らを見やれば、いつの間にか中身の新しくなったティーポットが置いてある。

おそらく空気を読んだ瀟洒なメイド長が気付かれないように換えていったのだろう。

それを確認し、離れた二人に声を掛ける。

「そんな二人。そろそろ問答はやめてお茶にしましょう。幸福と違って紅茶の葉は目減りするのだから」

2 狂える少女は絆の夢を見るか？

☆☆☆

「——しっかしどう説明したものかな、フランには」

暗い廊下を歩きながら、魔理沙はぼやいた。

悩んでいるようだったが、微塵も徒労感を感じさせないのがこの若き魔術師の長所であった。

探究心とそれに相応しい努力、そして諦めない意思と活力。

持つて生まれた才能の乏しさを、生命の輝きそのものを積み上げることで塗り替えようとしている。

霧雨魔理沙は、百年以上の長きを生きたパチュリーにとってみれば、どこか眩しさを覚える少女であった。

「理解できないのは、多分因果関係の方なのよ」

珍しく魔理沙の見送りに出ることにしたパチュリーは、それにぽつりと答える。

ナイトキャップにパジャマ、その上に外套を羽織っただけの姿のままなのは、これが正装なのだから仕方が無い。

「ん？ つまり、フランが楽しい”↓私が楽しい”の繋がりがつてことか？」

「そう。妹様は五百年近くもの間あの地下室に幽閉されたままだった。ほとんど誰とも会話することも無く、誰とも感情を共有することも無く。……貴女と出会って今に至るのだから、私たちからすればほんの僅かな間のことなのよ？」

フランドールはその幼い外見とは違い、それほど無垢でも無知でもない。どれほど子供染みても、五百年の年月を生きた吸血鬼なのだ。事象や概念に関して、書物で得られる程度の知識はちゃんとする。

「まあそうかもな。妖怪の時間間隔は妖怪でない私には良くわからんが」

「貴女はそのままでも充分妖怪染みているけれどね。——それはともかく、妹様にとっては『自分が嬉しい』ことと『他人が嬉しい』こと

はわかる。でもそれはあくまでも別個のものであって、感情を共有するということはまだ実感としてわかっていないのよ」

「ふうむ。保護者の情操教育に問題ありだな」

したり顔で頷く黒白の魔法使い。評論家にでもなったつもりだろうか。

「どうだか。少なくとも私は保護者ではなく監督者だから。教育方針に関してはまだ口を挟めないのよ」

この館の主にして話題の人物の実姉たる、〝永遠に紅い幼き月〟をパチュリーは思う。彼女との友人付き合いもいい加減永きに渡っているものだ。

「にしても何でレミリアはフランを幽閉したりしたんだ？ そりゃ力が強すぎるってのはあるかもしれないが、お前ぐらいの魔術師なら能力に制限をかけるなんてことはお茶の子さいさいだろうに」

無表情に「お茶の子がどうかは知らないけど」と前置きを挟み、パチュリーは言った。

「生まれながらに狂っていたせいだとか、その特異極まりない能力のせいだとか、外向きの理由は色々とあるのでしようけど。最たるものは、レミイほどの力の持ち主が『それが最善』であると判断したからでしょうね。運命を見通す彼女の瞳にさえ、これ以上の選択肢は見つからなかったということじゃないかしら。……私がこの館に来たのは妹様が幽閉されてから随分後のことだし、レミイに問い質そうにも、あの性格だしね。本当のところはわからないわ」

「ふうん。〝運命を操る程度の能力〟つつても、万能じゃないんだな。何の足しにもならないというか、まるつきり気の持ちようというか」「本人が聞いたら怒るわよ?」

パチュリーは小さく笑い、咳き込んだ。

「大丈夫か？ 喘息」

「……喋りすぎたわ。今日は発作で眠れないわね」

自嘲と虚勢が半々の台詞に、魔理沙は悪戯っぽく笑った。

「添い寝して絵本でも読んでやろうか?」

「遠慮するわ。寝てる間に魔導書をどれだけ盗られるかわかったもん

「じゃない」魔理沙が小脇に抱えた一冊の本にちらりと目を向ける。
「それだって妹様の家庭教師代に黙認してるようなものだし」
「当然の報酬だぜ。それに借りてるだけだ」
「おかしなものね。貴女なら本当は盛大に壁をぶち抜いて盗ってく癖に、わざわざ報酬だなんて。どういふ風の吹き回しかしら」
「さてな。私はいつの日も風の吹くまま気の向くままだぜ？」
からからと笑う白黒の少女に、紫色の少女は溜息をつく。時折こちらが恥ずかしくなるぐらい真っ直ぐなのに、基本的にはいつもこつやつて本心を誤魔化す。幻想郷ひねくれ者選手権などがあれば、スキマ妖怪辺りとタメを張るんじゃないかなろうか。

「……んじゃ、また明日来るぜ」

いつの間にか玄関だった。扉を開けると吹き込む冬風が二人の髪を揺らした。遠く正門の鉄格子の向こうに、赤髪の門番が見える。

「はいはい。夜道気をつけなさい」

「誰に向かって言ってるんだ？　じゃあ、お休みパチュリー」

「いい夢を、魔理沙」

とんがり帽子を被り直し、首にマフラーを巻いた魔理沙を乗せ、つむじ風と星屑の光を巻いて彼女の箒が飛び立つ。黒白の後姿が夜闇に消えて、その煌きの残滓が本物の星と見分けが付かなくなるまで、パチュリーは冬空を眺めていた。

「——パチュリー様？　お身体に障りますよー」

遠くから、門番が声をかけてくる。良くあの距離で声が届くものだと感心する。さすがにこちらはそんなに大きな声が出ないので、手を上げてそれに答えた。

「……寒」

ぶるりと身体を震わせて外套の前を搔き合わせると、魔女はそそくさと再び自らの巣穴——図書室へと踵を返した。

☆☆☆

3 闇の中で少女は

☆☆☆

実を言えば、あの時期——俗に紅霧異変などと言われているようだが来るまで、フランドールと面と向かって話したことはほとんど無かった。

否、今ですらもどちらかと言えば他人任せで、自分から何かを話しかけたことなど数えるほどだ。レミリアから監督役を頼まれたとは言え、姉の友人で居候という比較的微妙な立場のせいかも知れないが、何となくフランドールに対して一定の距離を置いてきた、という自覚がパチュリーにはあった。

今までして来たことと言えば、メイド長の「この本を妹様に貸しても良いか」という確認に対する是非だったり（ちなみに貸した本はほぼ間違いなくフランドールの能力によって破却されているため、戻ってきたものは一冊もない）、彼女が時たま脱走を試みた際に紅魔館の周囲に雨を降らせて閉じ込めたり、実力行使で地下室に戻したりといった程度のことである。

……正直、嫌われていても不思議ではないと思っていたし、顔を合わせる機会の多くなった最近でさえ、彼女が自分をどう思っているのか皆目見当が付かない。

今もって、パチュリーは魔理沙を介さねばフランドールに対し話しかけることも出来ないほどだ。二人つきりでは話題など一切無いだろう。

何故かと考察するに当たって、パチュリーはいつもの癖で自嘲気味に笑うしかない。暢気で楽天な幻想郷の大部分の住人に比べると、只でさえパチュリーの自己分析は自嘲と皮肉の割合が多いのだが。

ともかく、引きこもりがちで自己の内面に没頭しがちな自分にとって、理知や常識に囚われない、世間知らずな「子供」の世話がかなりの難題であることは間違いなかった。

そういう意味では、むしろ似たもの同士であるのかもしれない。強

制的に外界から隔離された紅魔の禁忌と、自発的に己の殻へと閉じこもる知識と日陰の魔女という違いはあれど。

だからこそ、自分よりも百年以上も年若い人間の手を借りているわけなのだが……。

☆☆☆

パチュリーが図書室の本棚から『オスカー・ワイルド作品集』を見つけたのは、魔理沙が帰ってしばらくしてからだった。

「……うん」

「——どうかされたんですか、パチュリー様？」

決心を固めたパチュリーに、司書の小悪魔が声をかけてくる。

「今から地下に降りようと思うのだけれど、ランタンはどこだったかしら」

「えっ？」

露骨に彼女はおののいた。そんなにおかしなことを言っただろうか？

否、確かに言った。

「……心配しなくてもいいわ、本を差し入れに行くだけだから。最近
は安定しているみたいだし、別にとつて食われたりはしないでしょう」

「誰か、他の者に任せるとするのは……」

「いえ、自分で届けたいのよ」

「は、はあ」

止めるべきか迷っているらしい彼女の頭をぽんぽんと撫でて、パチュリーは少しだけ微笑んだ。

☆☆☆

階段を降りていく。

陽光を遮るために窓の少ないこの紅魔館は、ただでさえ酷く空気が滞る。パチュリーが風（木気）の魔術によつて幾分換気を良くしてはいるものの、吸血鬼というのは元来墓場の空気を好む。

墓場の空気は死の匂いだ。地脈の関係で滞った風は、対流が無ければやがてそこに棲まう精霊たち共々、だんだんと腐つていく。流転と成長こそ風の精霊の本分だというのに、それを封じられた彼女たちは生きながらに腐敗し、狂ってしまうのだ。

常人には有害なガスになりながら、土や水の精霊たちも巻き込んで毒の割合を高めていき、そうしてそこは名実共に「穢れ地」となってしまう。

吸血鬼たちアンデッドは、そういった負の連鎖と共にある存在だ。本来ならばその生態そのものが墓場と同質。死を呼吸し、死によつて活動する。命あるもの全ての天敵。

しかしスカーレット姉妹をそういう不潔な死人と同列に並べようなどとは思わない方がよい。本人たち——特に姉の方などに知られたならば、ただでは済まない。

彼女たちは生まれながらの吸血鬼、真の祖たる貴種である。死なないからこそその不死者。死んで吸血鬼へと変質したような凡百の死者風情とは何もかもが異質だ。格が違う。殻が違う。核が違う。

人間にとつてみればどちらにしる恐ろしい存在であることに違いはなからうが、少なくとも彼女の友人を称する紫色の魔女にしてみれば、図書室の本が黴びない程度の湿度を維持出来るのは幸いということであつた。

霧の湖のほりに建つこの館の地下ともなれば、石壁から染みてくる水分の量が馬鹿にならない。図書室の環境を保つのはパチュリーにとつて死活問題なのだ。

……階段を降りていく。

闇は濃い。

手にしたランタンの明かりが精一杯に暗がりを押しのけるものの、

四方八方から押し寄せる闇の圧力にはそれにもか細い抵抗に過ぎない。2メートル先すら覚束ない暗闇は渦を巻いて心を苛む。夜の住人たる魔女パチュリー・ノーレッジにとってすら、その向こうにあるものを思えば、中々に酷なものだった。

そう、常に闇がわだかまるこの屋敷の最奥、そこに「彼女」はいる。最強にして最高の吸血鬼たる実姉の能力を以てしても御しきれない、最凶にして最悪の吸血鬼だ。

レミリア・スカーレットが魔の頂点だとすれば、彼女こそは魔の極点。その一つが彼女の持つ能力に現れている。目に見えない「運命を操る程度の能力」を持つ姉に対し、妹は目に見える「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」を備えていた。

曰く、事象にはあまねく「目（スポット）」がある。存在を維持する力の集中するその場所は、万物共通の弱点だ。彼女はそれを自らの手の中に移動させ、握り潰してしまうことで存在そのものを破却出来る。

生命も物質も現象も概念も。目にし、理解出来るものならば尽く彼女の前では平等だ。

ありとあらゆるものが、彼女の能力の前では等しく死ぬ。既に死亡した亡霊すらその理の外へと逃れられない。概念核、魂魄を消し飛ばされて滅び去るだろう。

原理は不明。そも、この幻想郷にあつて解明出来るものはたかが知れている。神秘であるからこそ強力であり、故に幻想の中に押し込まれたからこそこの世界に存在しうる。その異能の住人の中にあつてすら、彼女の能力はトップクラスの危険さであった。

何しろ下手をすればこの幻想郷を包む博麗大結界ですら破壊してしまう力だ。結界を失えば、破綻した幻想は「外の世界」の世界律によつてあつという間に塗り潰されてしまうだろう。それは幻想の住人にとってみれば、文字通りの「失樂園」となる。

そしてその桁外れの異能を担う少女は——事も有ろうに狂人であるときている。……実際のところ、正気か狂気かの真偽は不明だ。とはいえ、世界を壊すだけの力の担い手が容易く激発しうるという可能

性は、彼女の存在が危険視されるには充分過ぎる理由であった。

……階段を降りていく。

正直なところ。

こうして彼女の部屋へと赴く中でパチュリーは後悔すらし始めていた。メイドの誰かに任せておけば良かった。あの年若い魔術師に触発されたからといって、わざわざ自分で地下へと降りる必要など、全く以て無かったのだ。

しかし、パチュリーは止まりかける脚を内心で叱咤する。これは気まぐれでもなんでもない。自分自身が必要だと思ったからこそ、こうして動いているのだ。『動かない大図書館』の異名を取る自分が動くのは、本当に特別なことに対してだけなのだから。

知らず、喉が鳴る。持病の喘息ですら、今や文字通り息を潜めているかのように音沙汰が無い。声帯を震わせることそのものが自らの寿命を縮めてしまうかのような錯覚に囚われる。自分の足音ですら石造りの通路に反響してこの世のものとは思われず、大して長くも無いはずの階段が、まるで地獄へ続いているかのようにさえ思われた。右手のランタンと、左手の本を抱え直す。

パチュリーの本拠である図書館も位置的には地下にあるが、フランドールの部屋はそれよりもなお深い地下に存在している。昔、まだこの館が外の世界にあった頃は牢獄だったのだろう。

——やがて。ランタンの明かりの範囲内に、「忽然と」という形容をしたくなるぐらいの唐突さで扉が現れた。

4 少女は檻の中にひとり

——やがて。ランタンの明かりの範囲内に、「忽然と」という形容をしたくなるぐらいの唐突さで扉が現れた。

鉄と銀で出来た重厚で巨大なそれは、一人の少女が暮らす私室の扉として、あまりに相応しくない。いや、この世で最悪の魔物を封じる扉としては、むしろあまりに脆弱と言えるかも知れない。

☆☆☆

……魔物。そう、我々紅魔館の住人は未だに「彼女」への恐れを拭えずにいる。

幻想郷に紅魔館が《幻想入り》ブレインシフトしたことでフランドールの封印は確かに解かれた。現世から隠しておく必要が無くなったはずだったのだ。だが、その日まるで狙いすましたかのように館を訪れた「境界の賢者」によつて、それは新たな彼女の束縛となった。

「——彼女を。地下の牢獄に住まうあの吸血鬼を、この館の外へは出さないでいただきたいのです」

女はそう言った。幻想郷を包む博麗大结界を維持するために、フランドールの存在は危険なのだ。

結局の所フランドールはこの、世界から排斥された存在たちの楽園においてすら排斥される存在だった。

彼女への罪悪感と、彼女を館に留めおかなくてはならない危機感、そしていつあの異能が自分へと振り下ろされるかわからないという根源的な恐怖。それが今の紅魔館の現状だ。

魔理沙がやって来て、フランドールは確かに変わった。封印が解かれたばかりの頃より、ごく普通の少女のように笑うようになった。

だが、紅魔館は変われずにいる。今もまだ。

☆☆☆

扉の前に立つ。気力を振り絞って、拳で扉を三度打つ。

「……妹様」

ノックと言うには禍々しい響きが消え去った後で、部屋の中にいるだろう少女へと呼びかける。

意識せず小声となつてしまい、一つ咳払いをしてもう一度繰り返した。冷たい闇の中に残響が消える。

返事はない。仮にも吸血鬼がこの時間に眠っているというわけでもないだろうが、人生の大半を昼夜のない世界で生きていけば、体内時計も狂うのかも知れない。

仕方なく、鍵を外し肩で押すようにして扉を開く。

錆びついた蝶番が、亡者の群れのように背筋をざわつかせる悲鳴を上げた。油を差しておくようメイド長に頼まなければ。

扉が開いた途端、今までよりもさらに濃度の高い闇が視界を覆う。さすがにこの暗さは、吸血鬼ならぬ身には辛いものがある。ランタンの明かりがあつてなお、自分の手の輪郭が不確かに見えるのだ。

意を決して踏み込む。闇の中へ再び、妹様、と呼びかける。相変わらず返事はない。

ここにはいないのだろうか？

闇の中、ぼんやりとランタンの明かりの中に鉄格子が浮かび上がる。

フランドールは、既にこの部屋で暮らす義務はないにもかかわらず、この部屋を住まいとしている。

自ら檻の中へと舞い戻る。それがどういう心算なのか、それは正直なところわからない。

魔理沙あたりは、もしかすると何故なのかあたりが付いているかもしれない。そういうところに、特別敏い人間なのだ。

とにかく、部屋の主を探さねばならない。

そして、本を自分の手で渡すのだ。そしたら、何か、変わるかもしれないのだ。

ベッドの方に明かりを向けようとランタンの遮光窓を調節――

「――だあれだ」

声は背後からだった。同時に理解不能な悪寒が躰の芯を駆け抜けた。

がしやん、とランタンと本が手から滑り落ちて音を立てる。

床には絨毯が敷き詰められていたために、割れるようなことは無かった。

が、パチユリーには既にそんなことを気にしている余裕がない。くすくす、と囁くような笑いが首筋を撫でる。

全身を冷たい死の予感が包んでいる。

一瞬にして自らが氷の彫像と化したような錯覚。

ああ、まずい。

これは死ぬ。

今まさに死んでもおかしくない。

というか死ぬ。

「ねえパチユリー、答えてよ。わたしはダアれ？」

長い腕に抱き締められているかのような感覚。しかしそこに親愛の温かみは無い。鉄の義手による抱擁ですら、もつと暖かなものだろう。それもそのはず、実際に彼女は肌に触れているわけではない。

恐怖が否応なくそれを悟らせる。今まさに、自分の命は背後の悪魔に握られている、と。存在の死点、〃目〃を文字通り掌握されているのだ。

彼女が少しでもその手に力を込めれば、パチュリー・ノーレッジという存在は針でつついた風船よりも呆気無く弾けるだろう。魔術師として積み上げてきた研鑽も、織り上げてきた成果も、築き上げてきた日常も。全て意味など無くして塵芥と化する。

「だいじょうぶ？ 脈が安定してないよ？」

笑いながら爪の先で〃目〃を撫でてくる。途端に白目を剥いて失神したくなるほどの戦慄が魂を揺さぶる。さながら猫に弄ばれるネズミの心地だ。

今までの生の中で命の危機に晒されることはままあった。しかしどれだけ死地を経ようとも、この悪寒ばかりは慣れるものではない。人間としての常識を外れたところにいる魔法使いという種族ですら、恐怖という本能ばかりは乗り越えられないのだ。

「こんな地震えて、カワイソウに。ねえ？」

口調は何とも愛おしげでさえある。

「く、はっ」

詰まった喉を無理に開くと、老婆のような喘鳴が漏れる。

ふっ、とその時不意に再び部屋が闇に鎖された。

落とした拍子にねじが締まったのだろう、ランタンの火が消えたのだ。急に周囲の温度が下がったような気さえする。

その網膜を刺すような闇の中で、相も変わらず存在の死点を掌握された状態のまま、パチュリーは無我夢中で己の指を繰った。

爪先から髪の毛の先まで電気でも通ったように恐怖の痺れが貫いているのを感じる。だがそれを堪えて、震える指先を虚空に踊らせる。

早く、早く、早く。

そしてこの窮地のさなかにあって、弛まぬ研鑽はしかと実を結んだ。

掌中に灯る簡易魔法陣が、正確に同心円と五芒星をなして光を放つ。術の発動と共に円の中心に召喚された一枚のカードを、引き裂く

ほどの強さで掴み取る。

我は呼ぶ、天より陽の一片ひとひらを。滅せよ、悪なる夢の尽く。

「——日符、《ロイヤルフレア》っ！」

宣符と共に、冥府の底に太陽が落ちた。

5 運命と少女は出会う

☆☆☆

「——げほっ、ごほ、っ」

「……おいおい、大丈夫かよ」

図書館傍の自室。パチュリーは止むことの無い発作と発熱に見舞われていた。見守る魔理沙の顔にもいつもの笑顔はなりを潜め、気遣わしげな表情がある。

あの後、館を揺らした轟音に慌てた家人が押っ取り刀で地下室に駆けつけたところ、フランドールの部屋の前で黒焦げになって倒れたパチュリーを発見したらしい。

非殺傷設定の施されたスペルカードであったにもかかわらず、制御もなしに放たれた彼女の最大火力は己の身さえも灼いたのだ。

意識を取り戻したパチュリー自身が魔法で火傷は直したものの、今度は一気に魔力を消耗したせいで体調を崩し、現在のこの体たらくというわけだ。

「……め、いわく。かけるわね……っえほっ」

「あー、喋るな喋るな」

ひゅーひゅーとひつきりなしに喘鳴を立てる喉をなだめる様子にして、パチュリーは自嘲する。

「……まったく、慣れないことは、するもんじゃないわ……」

「喋るなっつーに。おい咲夜、薬は？」

いつの間にか水差しの交換を持って現れていたメイド長に、魔理沙が尋ねる。

「以前、永遠亭の薬師にもらったものを先ほど。もうすぐ落ち着いてくるかと思えます」そう言うと、彼女は魔理沙の肩に手を置いた。「後は任せなさい、魔理沙。貴女は妹様のところへ行ってさしあげて」

「お、おう」魔理沙もあまり長居してはこちらの身に障ると考えたのか、素直に頷いた。「早く治せよな、パチュリー。フランも心配してるぜ？」

目で頷く。

そつと埃を立てないように退室する魔理沙の背を見送り、パチュリーはようやくやく目蓋を閉じた。

薬が効いてきたのか、段々と体の不調は睡魔に押し流されていく。傍らで甲斐甲斐しく看病を続けるメイド長の気配を感じながら、いつしかパチュリーは眠りに落ちていた。

☆☆☆

……いつの頃からだろう、自分が他人と違うことに気づいたのは。パチュリーは生まれながらの「魔法使い」である。本来人間は《捨虫の術》《捨食の術》という二つの術を体得することにより、人間を辞めて魔法使いとなる。職業としてのそれではなく、種族、概念、存在としての魔法使いだ。

大気中の魔力を呼吸し、睡眠や食事などをすべて体内の魔力によって代替し、寿命を超越し成長を止め、その身が世界にあり続ける限り魔術の研究に魂を捧げることを誓った、狂おしき理性の徒。それが魔法使い。

しかしそれを子々孫々まで永続させることで、己の血筋に連なる者たちにより効率よく魔術の研究をさせようと考えた狂人たちがいた。そしてその試みの結果として在るのが、ノーレッジ家を始めた魔人の一族だ。

家柄は一応貴族なのだが、魔法使いとしての成果から貴族となったのか、逆に貴族の道楽からスタートして魔法使いに至ったのかはパチュリー自身も良くは知らない。かつて19世紀の英国に蔓延したオカルティズムの隆盛に一役買っていたのがパチュリーの父母で、その頃から既に吸血鬼の一族であるスカーレット家とは盟友の間柄だったという。

勿論貴族であるからには、社交界への参加が半ば義務のようになっている。

ノーレッジ家も例外ではなく、殊に野心に満ちた当世の魔術師で

あつた父は研究よりも政治に熱心であつたから、パチュリーはそのおまけとして、パーティーなどには必ずと言っていいほど同席させられた。

きらびやかな社交界への興味などは全くなかつた。むしろ、泥濘めいた内心を隠して目を光らせる出席者たちへの侮蔑と嫌悪、そして恐怖が勝つた。何より、大人たちの付属物でありながら自身もその権力を帯びていて当然とでも言いたげに振舞う、粗野で高慢で残酷な子供たちがパチュリーは何よりも嫌いだった。

パチュリーは幼い頃から陰を背負つた少女であつたが、何ぶん父が有名人であるし、容姿そのものも抜きん出ている。子供たちの陰湿な嫌がらせの対象となるには充分すぎた。

飲み物をドレスにかけられるなどは序の口で、人混みの中で足を引つ掛けられたり、アクセサリーを奪われて隠されたりもした。本人たちは遊びか暇つぶしのつもりであつたのかも知れない。だがパチュリーにとってそういういった悪意の数々は繊細な神経をすり減らして余りあつた。持病であるストレス性喘息のせいもあつて、パーティーへの参加を拒絶するのも当然の成り行きである。

ほとんど対人恐怖症の域になつたパチュリーは母の元で魔術を学びながら、どンドンと孤独の殻に籠るようになっていった。母も基本的に娘より自分の研究を愛する性分であるから、その傾向は尚更強くなるばかり。

そんな時だ、彼女と出会つたのは。

「——人間というのはいつの時代も愚物ばかりだ。そうは思わないか？」

彼女はそう言つて笑つた。幼い少女だ。少なくとも外見だけは。

ショートカットの青みを帯びた銀髪をした、小柄で赤い目をした少女。背の低いパチュリーよりも尚小さく、いつものように誰かを見上げるようにして話さなくてもいいというただそれだけで、パチュリーは彼女に好感を抱いた。

引き籠もり状態にあつたパチュリーを案じた父が、半ば無理矢理に

パーティへと連れ出さなければその時彼女と出会うことはなかったはずだ。勿論父も父親としての考えではなく、後々政治的に利用出来る要素として、自らの見目麗しい娘の存在を他者にアピールしておきたかったのだろう。

銀色の彼女は、パチュリーと同じく父親に連れてこられた貴族の令嬢のようであった。しかし、他の着飾られた空疎な頭の人形娘たちとは一線を画すカリスマが、その小さな身には備わっていた。

見る者全ては彼女の纏う冷厳で威風堂々とした空気に息を呑んだ。とてもこんな幼い少女の持ちうる雰囲気ではなかった。

その日いつものように壁際で貴族の子弟から嫌がらせを受けていたパチュリーは、ホールの中に入室してきたその存在に思わず目を奪われた。周囲の悪童たちもまた同じであった。生きている世界が違う、とその場の誰もが本能的に感じたはずだ。

だが何を思ったか、少女の方は目立たない場所にいたはずのパチュリーに目を留めた。何故自分なのか、パチュリーにはその時全く分かんず、ただその妖精めいた小さな肢体がこちらへと近づいてくるのをぽかんと迎えることしかできなかった。

「そんな紫もやし。——そう、お前だ。ノーレッツジ家の者だな？　しばらく私のエスコートをしてもらおう」

有無を言わさぬ口調であった。少女らしい声高さであるのに、まるで歳経た王のような風格を帯びている。気付けばパチュリーを囲んでいた子供たちはみな後ずさっていた。

「え、ええと」

「要領の悪い娘だな。来いと言ったのだ、否やはあるまい」

ぐい、と白い腕が自分のそれに巻きついた。あれよという間に引きずられ、その場から離される。呆然と見送る子どもたちの視線はやがて人の波に遮られ、いつの間にか夜風の涼しいテラスへとパチュリーは連れだされていた。

パチュリーは何がなにやら混乱の中にいた。エスコートと言うがむしろ少女の方が自分を引きずっているし、何より自分は同性である。少女が何者なのか、どうして自分を知っていたのか、気になり問

おうかいややつぱりやめようかと考えたところで、先の少女の言葉である。

「——人間というのはいつの時代も愚物ばかりだ。そうは思わないか？」

おずおずと、パチュリーは口を開く。

「……愚かというのは、確かに同意するけれど」

「己の纏う金品や権力が、自身の価値を高めていると信じ込んでいる。だが私から見れば、皆等しく豚だ。屠殺場に並んだ肉の群れに、見目の違いなどあるものか」

二人は並んでテラスの手すりに背を預け、明るいパーティ会場の方に目をやっている。とは言えパチュリーとしてはそちらよりも、隣の少女の方が気になっていたのだが。

「……貴女も、人間が嫌いななの？」

「好きか嫌いかで言えば、前者さ。皆私に饗される血肉だ、嫌いになれようものかよ。もつとも、私は小食だから好ましく思える分量には限りがあるけれどね」

奇妙なことを口にして、少女は笑った。

「……私も、貴女の獲物？」

「お前は人間ではなからう？ ノーレッジの娘よ」

パチュリーは息を呑んだ。少女の瞳が夜の影の中で、赫々と輝く。「お前のことは父上から聞いて知っている。興味があったのさ、業深き魔女の裔（すえ）がどんなものかかね」

紅い唇から、ちらと鋭い牙がのぞく。微笑みは、まるで夜闇から浮き上がるように艶やかだった。

6 銀紅の少女と契約の夜

この少女は、人間ではない。薄々察していた事実が、色濃く浮かび上がる。

勿論パチュリーもまた人間ではないのだが、けれど人の中で生きてきた自分にとって、どちらかと言えば人間の側に属しているという感覚があった。父の影響でもあるだろう。だが、目の前の彼女は、もつと明確に人ではない。そんな彼女から自身の素性に触れられて、パチュリーは奇妙な慄きを覚えた。

人が嫌いなのに、何故こうまで自分が人でないと告げられて恐ろしいのか、パチュリーはにわかに分からなかった。

「……貴女は、何？」

「私は私さ。老人どもは『永遠に紅い幼き月』と呼ぶがね。スカレット家の名を聞いたことはないのか？」

ある。ノーレッジ家が古くから繋がりを持つ、夜を支配する者たちの家系だ。

「吸血鬼、なの？」

「そう、純血なりし紅夜の悪魔。それが我らだ」
言葉を失う。

吸血鬼の少女はその紅の目を細めて笑った。

「ノーレッジの娘よ。お前が此処に来たのは運命によるものだ」

「……運命？」

「信じていないという顔だな」

顔に出ているだろうか。パチュリーは躊躇いつつも反論する。

「宿命論は学問の敵だから。そんなものは存在しないわ」

神が存在しないのと同じように。

「はは」少女は可愛い物を見た、とでも言いたげに笑った。「運命というのは、無数の選択を積み重ねて試行した結果が、ある一定の未来へと収斂する概念だ。別に神が決めたものではない。さになればかくある、さにあらずんばかくあらざるといふ当然の帰結だよ」

「どうして私がここにいることが、運命だと?」

「ここに自分があるのは、父の気まぐれに過ぎないはずだ。」

「私がそうなるよう仕組んだからさ」

パチュリーは眉をひそめた。

「運命は水の流れに似ている。少し棒を挿しただけではその流れを変えられることなどできないが、小さな支流であるならば機を読み流れ易い方向へと後押しをするだけで、その向きを変えることも可能だ。……要点を言えばな、私が父上に働きかけ、父上がお前の御父上に働きかけ、それがお前に作用したのだ。運命とはそうやって変えるものだよ」

「……何故、私を?」

少女の理知的な言葉は、パチュリーにとって同世代の子供のそれよりよほど理解しやすい。好ましいほどだ。だが、何故彼女がそうまでして自分に会いたかったのか、それだけは理解出来なかった。

「私には、運命が観える」少女は言った。「未来へと無数に流れてゆく選択の結果と、それがもたらす因果の連なりとを、私は認識出来るのだ」

未来予知の類だろうか。

「それは、吸血鬼の能力?」

「いいや、私個人が持つ異能と呼べる力だ。……ともあれ、私はこれより先に起こることのおおよそについて観ることが出来る。そして私にとって最善の未来を選択するために、お前が必要だったのだ。ノーレヅジの娘よ」

「私が、必要……?」

そんな未来は、想像もつかなかった。

「それは、どんな未来なの。何が起るの?」

「知らない方がいい。選択の結果何が起るのか、すべて知ってしまっていたら人生は単なる作業になる。つまらないよ、そんな生は」パチュリーは口を噤んだ。少女の言葉には実感と諦念が痛いほどにこもっており、それ以上の詮索は躊躇われたのだ。

「……だが、そうだな。これは言っても良かろう」少女はふと考えて、

こう続けた。「その未来においてはな、お前と私は親友の間柄なんだ」
「しん、ゆう……?」

「——そう」

少女は小さく、はにかむように微笑んだ。

どきん、とパチュリーは胸を締め付けられるような感覚にとらわれて、少女の微笑に見とれた。それまで王の風格を帯びていた彼女が、不意に外見相応の可愛らしさを取り戻したようであった。

「お前はこの私の生涯で最高の友人となる。……こんなにはつきりと告げてしまえば、お前は不快に思うかも知れない。私は打算でお前と友誼を結ぼうとしているのだから。けれど私は信頼しているのさ。私の運命と、そしてお前自身を」

「信頼……」

そんな言葉はついぞかけられたことがなかった。父母からの信頼を受けるにはあまりにも無力な魔法使い未満であったし、それ以外の誰かとは深い関係を持ったことがなかった。未来の自分は、彼女からの信頼を受けるに足る人物なのだろうか？

「……貴女は打算と言うけれど」パチュリーはしばらく考えた後に口を開いた。「こちらにも打算的であれば、別に裏切りにはならないのではなくて?」

「へえ?」

面白そうに少女が眉を上げる。

「貴女が未来に私の力を必要としているならば、私も貴女の力を必要とすることにするわ。私が困った時には助けて頂戴な」

「それはどちらかと言えば契約か。……しかし私たちの関係にはむしろ相応しいかもしれないね。何せ悪魔と魔女だ」

くくつ、と白く細い喉を鳴らして少女が笑う。

「いいだろう、では契約成立だ」

「……そう言えば、貴女の名前をまだ聞いていなかったのだけれど」

パチュリーがそう言うと、少女は目を瞬かせた。一呼吸分の間の後、彼女は目を丸くして口元に手を当てた。

「——うっかりしてた。そうか、未来を覗いていたせいですっかり挨拶

した気になっていたよ」

不意を打たれたせいかわ、口調が少し幼くなった気がする。パチュリーはそのギャップに思わず微笑んだ。

「ごほん。では改めて名乗るとしよう」彼女は再び胸を張った。「我が名はレミリア。レミリア・スカーレットだ。異名はいくつもあるが、お前は特別にレミィと呼ぶことを許そう」

「パチュリー・ノーレッジよ。好きに呼んで頂戴」

「ではパチエと呼ぼうか。ふふっ」

「……何？」

少女、レミリアの微笑にパチュリーは首を傾げた。

「いや、うん。『識っている』のと実際に体験するのでは、随分と感慨が違うなと思ってね」

「……そりやどうも」

パチュリーは僅かに反応に困って、とりあえず肩をすくめた。

それがこの先百年以上に渡って続く、親友との出会いであった。

☆☆☆

懐かしい夢から目を覚ますと、傍らで当の親友が椅子に腰掛けたまま眠っていた。

「……………まったく」

鼻ちようちんを膨らませながら、油断しきった様子で船を漕いでいる。吸血鬼が居眠りするのはどうなのかと小一時間問い詰めた。

目をこすりながら上体を起こし、体の調子がある程度回復しているのを確かめる。傍でござと動いていたせいかわ、レミリアの鼻ちようちんが弾けた。

「んあ」

「おはようレミィ」

「おふあよおう、パチエ……………むにゃ」

寝ほけ眼で口元の涎をこするその様は外見相応の幼さであり、とても齢500を超える吸血鬼とは思えない。ぶっちゃけカリスマの力

の字も無い。

時計を見れば、最早昼である。夜行性の彼女からすれば、今は真夜中に起こされたに等しい状態だろう。

「眠いならそのベッド使っても良いわよ？」

「ん……いや、いい。部屋に戻る」

ぐいと小柄な身体が伸びをすると、背中のコウモリに似た翼も同じくふるふると震えた。可愛い。

そのまま立ち上がって部屋を出て行くかと思われたレミリアだったが、扉の前でぴたと足を止めた。

「パチエ。身体はもう良いのか？」

「ええ、お陰さまで。見ていてくれたの？」

「……まあ、ね」珍しく言葉を濁すと、少女は背を向けて続けた。「ねえパチエ。ひとつ、お願いなだけどさ」

お願い？ 彼女が、自分に？

「——私を置いて、居なくならないで」
胸を、突かれた気がした。

「フランのことは、ゆつくりで良いんだよ。あんまり性急に何かをする必要なんて無い。……だから、だからさ」

僅かに震えをにじませた声で、少女は言った。

「もう、こんな危ないことしないで」

「……心配させたみたいね」

衝撃に心を揺さぶられながら、何とかそんな答えを返した。

「親友が妹に殺されかけたとあってはね。これだけ動揺したのは何十年ぶりだろう、父上が死んだ時でさえこんなにはならなかったよ。事情を聞いた時にはアイツを本気でくびり殺してやろうかとさえ思ったさ」

少し早口でまくしたてた彼女の表情は、やはり伺えない。

パチユリーはその華奢な背中に、声をかけた。

「ごめんなさい、レミイ」

「……いいよ、許す。無事だったし」

それだけ言って、彼女は部屋を出て行った。

独りきりになった部屋の中で、ぼすつ、と枕に顔をうずめてパチユリーは独りごちた。

「——それでも、何かしてあげたいのよ。あの娘にも、貴女にも」
たった二人だけの姉妹がこんなにもすれ違い続けて、良いはずがない。

変わりたい、とパチユリーは思った。変えたい、と強く願った。

7 それは少女の決意

☆☆☆

それから再び意識が落ちていたらしい。

短く浅いまどろみから浮上する。傍らに人の気配。誰だろう、とパチユリーは薄く目を開いた。

「——っ!？」

赤い瞳が覗き込んでいた。目の前で金髪が揺れる。

息を飲んで身を固める。目を閉ざし、悲鳴を身体の中で押しとどめる。

次に恐る恐る瞼を開けた時には、そこには誰も居なかった。傍らの時計が、レミリアが去ってからそれほど時間が経っていないことを示している。

「妹、様……?」

夢だったのだろうか。浅い眠りでは悪夢を見ることが多いということにあれだけ恐怖にさらされたのだから、その心的外傷が残っていてもおかしくはない。

だが、枕元に置かれた一冊の本に気付き、パチユリーの背中が凍りついた。

『オスカー・ワイルド作品集』

あの夜、地下の牢獄へと置き去りにしてしまったはずの書物である。

慌てて周囲を見渡す。やはり室内には誰の気配も残されていない。扉が開く音すらしなかった。

「……………」

何とも言えない背筋の震えと共に、パチユリーはベッドから降りた。

そうだ、まずはシャワーを浴びなくては。

冷たい汗が、痩せた背中を流れ落ちた。

「よう、お目覚めか？」

日が沈んだ頃になってようやく自らの巢、図書館へと顔を出す。

その暗がりの中で目の覚めるような金髪が振り返り、思わずパチュリーはぎよつとした。半拍の後にそれが魔理沙であると気付いて、妙に気恥ずかしくなる。よほど自分の無意識はフランに怯えているらしい。

「……妖怪ぬらりひよんが居るわ」

「おいおい、私はいつの間に妖怪の仲間入りをしたんだ？」

「その凶々しさが身についたときかしら。ならきつと生まれつきね」

「こんなに清楚で可憐な魔法少女を捕まえてよく言う」

けらけらと笑う魔理沙は、図書室のテーブルで魔導書を読んでいたらしい。傍らでは小悪魔が慣れた表情でお茶を注いでいる。いつの間にかこんなに打ち解けたんだか。

脱力しながらパチュリーもその向かいの椅子に腰掛ける。すぐさま小悪魔がお茶を差し出した。礼を言おうと顔を上げると、小悪魔は少しいたずらっぽい表情でパチュリーに囁いた。

「魔理沙さん、かなり朝早くからいらしてたんですよ。パチュリー様によほど会いたかったんですね」

「……どうせ本を読みたかっただけでしょ。この人が心配なんてるもんですか」

むずむずする頬を強引にしかめ面にして、パチュリーはそっぽを向いた。小悪魔は尚もにやにやしながら「ごゆっくり」と言い残して書物の整理に戻っていった。彼女もパチュリーが本調子に戻って嬉しいのだろう。随分なはしやぎようである。

「それで」パチュリーは魔理沙に視線を向けた。「何か用でもあったんじゃない？」

「用というかな、」魔理沙は僅かな逡巡と共に本の頁に目を落とした。

「まあ、フランのことだよ」

「どうも私は随分私らしくないことをしたみたいね。会うもの皆にお咎めを受けるのだけだ」

「別に咎めるわけじゃないぜ」

「魔理沙はぱたん、と本を閉じてこちらを見た。相変わらず真っ直ぐな目だ。」

「お前がフランのことを誤解したかも知れない、と思つて話を聞きに来たのさ」

「……誤解というか、そもそも私も妹様には悪いことをしたと反省しているところよ」

「そうか。私の方でフランには会いに行つたけど、あいつもあいつで反省してる、というか、傷ついている感じかな。……お前、何でアイツがお前に喧嘩売つたかわかるか？」

「……さっぱりだけど」

「パチュリーは首を振つた。想像もつかない。」

「だろうなあ」

「何よそれ」

「別に私もフランから直接聞いたわけじゃないがな。咲夜や小悪魔からも情報収集したし、大体の事情はわかる。子供の考えることつてのは、結構みんな同じだよ」

「妹様は子供じゃないわ」

「じゃあ何だ？」

「言葉につまる。」

「あいつはな、パチュリー。お前らが思つてるほど凶悪なバケモンつてわけじゃない。吸血鬼だからとか能力がどーだからとか、それつてフランの中身を見てないじゃねえか」

「貴女に何がわかるのよ」

「パチュリーは反駁した。苛立ちで喉がかすれる。」

「……お前さ」魔理沙は急に声を落とした。「あいつに対して、面と向かつて叱つたことはあるか？」

「叱るなんて」

「幾ら何でも恐れ多かつた。いくら監督者とは言え、自分の立場が上

というわけではないのだ。何しろあちらのほうが年上である。

「お役目かもしれんが、お前はフランの面倒を見てる。姉貴の方はあいつに近づこうとはしない。なら、お前があいつの親代わりだ。そんなお前が、怖がってどうするんだよ」

「……説教でもするつもり？」

「誰にだよ。お前のほうが私よりずっと賢いんだろ？ こいつは説教とかじゃなくて、単なるお前への文句みたいなもんだ」

「何それ」

パチュリーが呆れたように呟くと、魔理沙は少し表情を崩した。

「パチュリー。子供つてのはな、コミュニケーションしたくてもできない相手には攻撃しちまうんだ。好きな子に嫌がらせしたり、親に我仮言つて怒らせたり。でもそれって、繋がりが欲しいって言うサインなんだぜ？」

コミュニケーションとは弱い攻撃である、とは何の本の一節だったか。ヤマアラシは互いに傷つけ合わないと距離感を学べない。

「あいつが本を壊すのは、お前に叱ってほしいからだ。あいつがお前を攻撃したのは、そうすればお前が自分を見てくれると思つたからだ。たとえ怒りからでも、自分に触れてくれると思つたからなんだ。……気づいてなかったわけじゃないだろう？」

「……知らないわよ、そんなの」

愛されなかった自分が、どうやって他人を愛せというのだろうか。そんなこと、どんな本にも書いてない。知らない。分かるわけがない。「私だつてさ、誰とでも上手くやれるわけじゃない」魔理沙は頭を掻きながら言った。「本を盗んだりとか、相手の都合も聞かずに居座つたりとか、そういうことから始めてる。氣遣つてるだけじゃ、相手の心に触れないんだよ」

それは本心だっただろう。パチュリーは思わず魔理沙をまじまじと見つめた。彼女は照れたように顔を背けた。

「最初は私たちだって敵同士だったんだ。それがこうして卓を囲んでお茶してる。どうやってここまで来たか、覚えてるだろ？」

「……あ」

「私たち幻想郷の住人にはとっておきがある。言葉なんかよりずっと雄弁で、ずっと傷つかない。強くて怖い相手や、初めて出会ったよくわかんない奴とでも、しっかりと『お話』できる方法だ」

パチュリーは思わず呆けてしまった。

どうしてこんなことに気づかなかつたんだらう。

「そんな……ことでもいいの？」

『そんなこと』なんだよ、最初はさ。大事なのは相手に関わり続けることなんだ。そこから相手を知って、間違いやすれ違いをひとつひとつ正して、だんだん好きになれば良い。時間ならお前らには腐るほどあるんじゃないのか？」

魔理沙はいたずらっぽくウインクしてみせた。……普段は少年めいた印象なのに、こういう仕草をすると彼女がとびきりの美少女だと思い出されて、どきりとする。パチュリーは俯いて頬の熱を隠した。

不意に、先程の自室で遭遇した怪異を思い出す。あれはやはり、フランドールであったのだろう。姿が不意に消えたのは、それが彼女のスペルで生み出した分身だったからかも知れない。

……彼女は、自分を怖がらせるためにわざわざ出てきたのではないだろう。魔理沙の言うように、それは彼女なりの不器用な何かであったはずだ。

「……私に、できると思う？」

躊躇いながら、パチュリーはそう聞かすには居られなかった。弱さを認めるというのは、無駄に長生きした心には随分酷だ。魔理沙はその不安を、太陽のような笑みを浮かべて吹き飛ばした。

「お前は誰だ？　『七曜の魔女』パチュリー・ノーレッジ。魔法を使わせりゃ幻想郷でも五本指だぜ。そんなお前が出来ないはずないだらうよ」

そこまで言われては、パチュリーとしてもビクビクしてばかりはいられない。

「……よし」

既に意思は定まっている。覚悟はまだ未熟だが、自分のやるべき事、やりたい事がはっきりしているなら、答えはひとつである。

動かない大図書館は、動き出したら誰にも止められないのだ。

☆
☆
☆

8 弾幕少女たちは月下に舞う

☆☆☆

夜、紅魔館の屋根へと登ったパチュリーの見上げた先、時計塔の天辺に彼女は腰かけていた。

青く澄んだ月の下で深紅のワンピースは逆光に沈み、しかしその背に彩られた虹色の翼は星明かりを結晶させたように鮮やかに輝いている。

その手には悪魔の尾めいた外見の杖が握られ、冷たい漆黒を蒼い夜に浮かべていた。

夢見るような一瞬の後、パチュリーは意を決してふわりと飛び上がる。

無詠唱で織り成される飛行術式が、形無き翼を魔女に与えている。魔理沙のような古めかしい箒などは必要なく、種族「魔法使い」はその身が既に一つの魔法なのだ。

「……ここにいたのね、妹様」

「その名でわたしを呼ばないで」

声をかけた瞬間、ぞつとするような怒りと共に紅の魔眼がこちらを凝視した。ガツン、とその手の魔杖が屋根を叩く。彼女の苛立ちが波となって夜を震わせた。

早速間違いを犯したことに消沈しかける。が、それを辛うじて堪え、強く睨み返す。

「フラン。外に出てはいけなと言わなかった？」

「貴女に面と向かって言われた覚えは無いね、パチュリー」

「確かにそうね。ならば改めて言います。館に戻りなさい」

「……別に戻るのは構わないわ。だって用は済んだから」

怒りはまるで最初から無かったように消え去り、代わりに蠱惑的な笑みがその幼顔に浮かぶ。

「パチュリーがここに来たから。ここにいたらきつと来ると思ったの」

ゆらりとフランドールが立ち上がる。人形めいた動きで、怪物めいた笑顔で。

「この館の誰も、わたしがどこにいようと見もしない。いないものように振る舞い、畏れるように逃げていく。お姉様だってそう！ 煩わしげに一瞥したら無視をして！ 何も言わずにどこかへ行ってしまうッ！ ……けどパチュリーは違うよね」

かつ、と靴底が屋根を叩く。彼女の周囲だけ重力が別方向に向いているかのように、こちらへと尖塔の壁を真つすぐに歩いてくる。

「パチュリーだけは、わたしが外に出ようとするのと止めに来る。わたしが暴れば駆けつける。…パチュリーだけが、わたしを見てくれた！」

「魔理沙はどうなの？」

「マリサは別よ。マリサは外から来る人だから。好きだけど、家族じゃないもの」

家族。彼女は確かにそう言った。

パチュリーはぐつと唾を飲み込み、自らもフランへと近づく。

「そうね。彼女は家族じゃない。家族の確執に、少し関わらせすぎたものだと思うわ。——だから」

ぴたり、30フィートほどの距離で互いに止まる。

「だから、私がやるべきなの」「うん」

近くで見るフランの顔。紅い瞳に、紫の影が映る。こんなにも、真つすぐに彼女を見つめたことが今まであつたらうか。

僅かな逡巡。だが、彼女が自分の行動に注視していることが、けななしの勇気をパチュリーの胸に取り戻させる。

「だから——」

意を決し、叫ぶ。

「拳骨をくれてやるからそこに直りなさい、フランドール！」

「できる？ できるのひ弱な魔女風情に？ うふふふ、あははははッ、やってみなさいよパチュリーッ！」

返される哄笑、そしてノーモーションからの突撃！

豪速で振り抜かれる魔杖。

だがパチュリーはまともにも当たれば真つ二つにされるであろうその一撃を、防御障壁の曲面を滑らせ、その反動で距離を置く。

離れながら抱えた魔導書に魔力を通せば、自動的に開かれたその書面に必要な術式が浮かび上がってくる。

選択する。——最初から、全力全開を！

「——火水木金土、五大は我が掌中に在り。七曜の魔女が此処に令する。顕現せよ《賢者の石》！」

「あは、ぶちかましてあげる！——歌えよ炎、我執るは神滅の刃！禁忌《レーヴァテイン》！」

両者の宣符が弾幕勝負の火蓋を切った。

パチュリーの周囲に一抱えほどの輝石が合計五つ召喚されると同時に、フランドールの手にした魔杖の先から紅蓮の炎が生れ落ち、まるで身の丈を超える大剣めいた形を成す。フランドールがその切っ先をこちらに向けた。

「手加減なんてしないから、このボクネンジン！」

「笑止！ 大魔女の実力にひれ伏しなさい！」

パチュリーの輝石から迸る五色の光線が、フランの振るう魔剣の斬撃から飛散する光弾とぶつかり合い弾け飛ぶ。轟音と閃光に紅魔館が激震した。

そのきらめきの中で、パチュリーは安堵した。

こうするべきだったのだ、最初から。

夜を彩る虹色の翼が、それにも負けず輝く少女の笑顔が、こんなにもまぶしいのだから。

☆ ☆ ☆

「これで宜しかったのですか、お嬢様？」

「フン、館の被害は問題ないわ。どうせ修復するのはパチエなんだし」
手にしたティーカップの水面に赤いさざ波が立つのを、レミリアは顔をしかめて見つめた。けれど、表の騒ぎを止めようとはしない。

館のテラス。激突する二人が見える位置に、レミリアと腹心たるメイド長はいた。

「いえ。最初から弾幕勝負に混ざらなくて良かったのか、という意味ですわ」

「基本的に弾幕勝負は一对一。この私が横からグングニルなんて差し込もうものなら、フランだけじゃなくパチエも怒るよ」

一笑して、紅茶を口に含む。広がる血の味が、今は少し苦々しい。

……本来ならば、子供を叱るのは肉親の役目であつたかもしれない。だが五百年を生きた吸血鬼として、たった一人の肉親として、妹へと何をすれば良いか。フランドールの力を恐れた父が彼女を幽閉して以降心を病んだ、彼女の為に何をすべきか。それが、レミリアにはわからないのだった。

自分では、どう足掻いても彼女の心を救えない。運命はそう告げていた。

遠からず、彼女の狂気はこの幻想郷を滅ぼす。それがレミリアの予見した最悪の未来。

白黒の魔法少女だけでは、ダメなのだ。魔理沙の前ではまるで普通の少女のように振る舞うフランも、館の人間が抱えた怯えや隔意を見るとすぐに心を閉ざす。それはどうしようもない事で、どうにもならない事だった。

レミリアはその運命を変えるべく、様々なことを試してきた。だが、自分では駄目なのだった。狂うほどの長きに渡り封印された彼女を助けようとしなかった。それだけで、最早姉妹の間には消えない確執の溝が刻まれている。……少なくともレミリアにはそう感じられた。

親友として全幅の信頼を置くパチユリーですら、彼女だけの力では無理だった。どれだけ理想的な軌道に運命が乗っていたとして、結局

最終的に結果を導くのは人の意思だ。パチュリーの行動次第では、レミアの目的は果たされない。

……果たしてパチュリーは、立ち上がった。

彼女がこうしてくれると識っていた。だからこそ彼女を囲い込んだ。だがもし、もししくじったら彼女は失われ、妹は決して救われない。

運命を操る力は、レミアにとって呪いだ。望む結果の付近へと事態を導くことができても、人の意思によつて動く未来はレミアの思う通りにはならないことが多い。高速で飛行している時に、決められたポイントを一つとして間違えず通らなくてはいけないようなものだ。眼前に立ちふさがる失敗の未来と、針に糸を通すような細い希望の道筋。

レミアは膨大に積み重なる運命の山に、そう、はつきり言ってみれば怖気づいたのだ。

自分は死なない。だが、親友は死ぬ。親友と妹を天秤にかけて、自分の力ではどうすることもできない妹を、自らの手で葬ることで救おうかとすら考えた。

考えて、自分の愚かしさが憎いと思った。

あまりにも無力。

強大無比なる吸血鬼が、無力。

ぐっ、と牙を噛みしめて、レミアは空を見上げた。出来るのは最悪の未来に至らぬよう、介入するタイミングを計るだけ。

吸血鬼に祈りは無い。あるのは冷徹な打算と、非情な覚悟。それだけなのだ。

9 星と月と少女たち

何発ものクナイ弾をその身に掠らせながら、パチュリーは思考する。弾幕勝負において重要なのは自らの居場所を空間的に把握する俯瞰視点だ。

セットされたのはお互い3枚。既に1枚目の札はパチュリーの側がスペルブレイクを果たした。

パチュリーは遠距離火力の手数で押すタイプである為、どうしても飛行速度が遅い。回避機動を最小限に絞り、ギリギリまで相手の弾幕を引き付けて躲しながら自身の弾幕を相手に投射し続けるのが主なスタイルだ。近距離の対処は苦手な方である。遠近共に一撃の威力が高く、機動力を利用して積極的にこちらに飛び込んでくるフランとは対照的だ。代わりに向こうは紙のように防御障壁が薄い為、上手く囲い込めば耐え切れず被弾するのが幸いだが。

現在のところ、戦術的にも心理的にも優位性があるのはこちらだ。フランは遮二無二こちらに飛び掛かってくるが、こちらはその進路に罠を張り待ち受けることで勝利を得られる。

もちろん、飛び込んでくるのは最初に宣符したのが神滅の炎剣レーヴァテインだったからだ。長大な刃を持つ巨剣を象ったスペルだが、それ故に弾幕の軌道は直線的。業火を思わせて飛び散る小弾も、離れてしまえば散漫な火の粉に過ぎない。屋内の限られたスペースで振るうのであれば脅威だが、屋外で遮るものが何一つ無い状態では躲すのは容易いとさえ言える。その為にフランはこちらが回避不能な近距離で振るわざるを得ないのだった。

確実に通過するであろう地点に《賢者の石》による十字砲火を置いたことで、フランは敢え無く被弾した。それ以降不用意な接近を反省したようで、彼女はこちらを遠巻きに旋回しながら弾幕を放ち続けている。2枚目のスペルカードはまだ温存するつもりらしい。

対するパチュリーは泰然としている。何しろ実戦経験の差があるのだ。

もしこれが弾幕勝負でないならば、フランはこちらをその暴虐とも

言える膂力で蹂躪すれば良い。吸血鬼とはそういったものだし、そうするだけの能力を持っている。

だが弾幕勝負ならばそうならない。ルールに則った戦いである以上、条件は同等。それどころか知略と経験で上回るパチュリーが有利なのだ。

行ける。パチュリーの顔に不敵な笑顔が浮かぶ。

「あはははッ、何を余裕な顔してるの？　これからなんだから！」

狂笑と共にぎらりと瞳の赤が輝き尾を曳く。凶兆の流星めいて、フランがこちらへと再び猛突撃をかけてくる。

宣言は無い。ならば撃ち落としてやろう。

「——我は呼ぶ、水脈統べる姫君を。圧せよ、その慈愛の腕かいなで以て！
水符《プリンセスウンディネ》ッ！」

喘息の気配は未だ無い。これならば！

発動に成功した魔術が、夜の虚空に怒濤を生み出す。のたうつ暴竜めいたその水流は、しかし瞬時に弾けて無数の泡を思わせる低速弾へと変わる。

対手をその緩慢な動きと物量で囲い込み、回避を行えなくなったところにマジックレーザーを放ってトドメを刺すのがこのスペルだ。ランクこそ低いが、純然たるランダムに撒き散らされる低速弾は、逃げ道絶無の牢獄を作り出すこともある。

高速で起点まで突っ込んできたフランに、これを躲す術などあろうはずもない。

勝った。パチュリーは確信した。確信して、意図せずフランの顔を見た。

「あは」

——見てしまった。

熱狂と冷酷と歓喜が混ざり合う、悪魔の笑顔を。

「わたしはいない　そこには誰もいやしない」
詠唱。

戦慄がパチュリーの背を駆け上る。
まさか。

「歌は告げる　かぞえうた　10から1へ　終わりの刻を」
抜き撃ちめいてパチュリーの指先から放たれた閃光が、一直線にフランの顔を狙う。

間に合え、間に合え、間に合え。
けれど光速は、あまりにも遅過ぎた。

「――秘弾」

レーザーは、ぼんやりと虚空に溶ける彼女の顔を「素通り」した。
「《そして誰もいなくなるか?》」
消えた。

完全に、あますところなく、その金の髪も紅の服も虹の翼も、虚空の狭間に滑り込むようにして消えた。

拡散していく泡の弾幕が、虚しく夜を彩る。

(……やられたッ)

歯噛みするも最早遅い。

半ば反射的な動作で回避するパチュリー。その障壁を擦過して、どこからか放たれた弾幕が危ういところを通り過ぎた。

フランの使用したスペル「秘弾《そして誰もいなくなるか?》」は一定時間自分の存在を量子の霧へと変え、フィールドから姿を隠すという反則めいたスペルである。

こちらの攻撃は無効化され、しかしフランの弾幕はあちらこちらから放たれる。攻撃をただただ時間が過ぎ去るまで耐え忍ぶことを余儀なくさせる、ほとんどルール改変とも言える異形の札だ。

フィールドには己独り。弾幕に当たればその名の通り、「そして誰もいなくなる」。

「まったく、やるではないの、フラン」

パチュリーは流れる汗を額に感じて、口元をひきつらせた。

こちらが第二の札を宣符するのに合わせ、それを無駄撃ちさせると

同時にこちらを疲弊させる。回避の苦手なパチュリーに対して、これは最適解といっても良い選択だ。

虚空より突如として湧き出してくる弾幕を、パチュリーは唇をかみしめて回避する。

避ける、避ける、避ける。

障壁を弾幕が擦過する音が耳障りだ。

少しでも回避の加減を間違えれば、工作機械に巻き込まれる木っ端のようにパチュリーのバリアは砕け散るだろう。

あと少し。あと少し。あと少し……。

孤独な戦いだっただ。

光の乱舞する闇の中で、パチュリーは上下の感覚すら失っていく。

狂いそうだ。

——唐突にパチュリーは気付く。

フランドール。彼女もまた、この孤独の中にいたのだと。

永久とすら思われる幽閉期間、彼女は己の大切なものも、感情の帰結先も、心のかたちすらもわからなくなるほどの永い闇を、ずっとずっと耐え忍んできたのだ。

想像するだけで、パチュリーにはとても耐えられないほどの虚無。

独りにして欲しいと願いながら、独りは嫌だと枕を濡らす彼女は、幼い金髪の少女の姿に己を重ねて思わず呼吸をつまらせた。

……それがいけなかった。

「——ッ、ゴホッ!？」

むせこんで、ようやく自分の体力が限界近くに至っていることに気付く。

汗が全身から滝のように流れている。

これは、いけない。

ふらついたパチュリーを、とうとう背後から放たれた弾幕が捉えた。

衝撃。

明滅する視界。

ほとんど意識を失いかけて墜落する中で、か細いながらも残されて

いた生存本能が飛行魔術を維持させた。

地面すれすれで何とか再浮上。

霞む目線を上げれば、ちやうど虚空から染み出すようにして紅い衣が現出したところだった。

時計塔の天辺に舞い降り、睥睨するようにその真紅の瞳がこちらを映す。

「アツハハハハハ！ その程度？ その程度なのパチュリー！ ほらほら、コンティニューして見せてよッ！」

牙をむき出しにして、悪魔のように悪魔が笑う。お伽噺の悪魔でさえも、今の彼女ほどに悪魔的ではなからう。

対するこちらは、魔女は魔女でも老婆そのものだ。

既に魔力はレッドゾーン。『紫の魔女』の顔面は、呼吸困難でさぞや青ざめていることだろう。

「……ふふッ」

荒い呼吸の中で、意識せずとも笑みが漏れた。

果たして、今までの自分はこのようになるまで必死に戦ったことがあつただろうか。

紅魔館が紅白の巫女と白黒の魔法使いによって襲撃をかけられた時ですら、ここまでではなかった。

「ッ、もちろんっ、続ける、わよ。まだまだ、遊んで、あげるから、覚悟っ、なさい……」

喋っているのか喘いでいるのかわからないほど息を切らしながら、パチュリーは挑戦的に笑ってみせる。

それを見て、フランドルもまたにっかりと笑う。

——次が、ラストスペル。

お互いに、申し合わせたように最後の一枚を抜き放つ。

フランは余裕たつぷりに。

パチュリーは息も絶え絶えに。

「——星よ、我が目に映らざるもの地に堕ちよ。涙よ、我が目に在らざるもの天を翔けよ！」

「――我は呼ぶ、天より月の一滴を。……でそ灌げ、果て無き闇の、あまね遍きを」

フランドールの周囲に、目に見えるほどに昂じた魔力が収束していく。手にした魔杖が変形し、まるで弓のような形へと姿を変える。

パチュリーの足元に、蒼く巨大な光の線が走る。それは瞬きの間に六芒星と同心円を描き出し、夜の闇へと抗うように光を帯びる。

「禁弾」

「月符」

宣符は、同時。

「《スターボウブレイク》！」

「《サイレントセレナ》ッ！」

激突する閃光が、夜闇を塗り潰した。